

Book Review 24-11 歴史 #ハルビン

『#ハルビン』（キム・フン著）を読んでみた。著者は1948年ソウル生まれ。長い記者生活を経て作家になった。

訳者は、中央大学法学部三年在学中の1978年に拉致され、24年間、北朝鮮に拉致されていた蓮池薫氏。

暗殺者と暗殺される者の歩みを追った歴史小説である。不当に支配された者が自ら暗殺者となり、西欧からの植民地化を避けるためにかつて尊王攘夷を唱えたものが自国の繁栄のために隣国を蹂躪する者と化す。現在、イスラエルとパレスチナがそれぞれの領土を空爆し、指導者の暗殺を繰り返している。

本書は、1909年10月26日にハルビン駅で安重根（30歳：1879年朝鮮国に生まれ、カトリック信者）が元韓国統監の伊藤博文を銃撃した経緯とその後を語っている。安重根は暗殺者だが、朝鮮・韓国国民には愛国者であり、日本人から見ればテロリストである。

伊藤 博文は大日本帝国の初代内閣総理大臣。急進的な植民主義者ではなかったが、朝鮮・韓国国民には祖国を奪われて、彼は過酷な試練を課す支配者の代表と映ったのであろう。

著者はこの複雑な話（国家と人間、共同体と個人、ことばと行動、テロと政治、愛と憎しみ、信仰と神への疑い）を淡々と進めてゆく。

本書は、暗く難しい話を静かに紡いでゆく。立場が変われば、見方が変わる。憎しみ合い、報復を繰り返す現在社会で私たちはどう振る舞えばよいのであろうか。そんな煩悶を持つ者に考える契機を与えてくれる本である。